夢童（ゆめわらわ）

菅波　茂

スマトラ沖地震・津波救援活動

04年12月26日。200年に1度と言われる規模の大災害がインド洋沿岸の国々を襲った。スマトラ島沖地震・津波である。AMDAインターナショナルのうち9カ国の支部と岡山の本部が共同して被災者緊急救援活動を実施するのは、84年の発足以来初めてである。現時点で10カ国が協力し、被災した3カ国に既に延べ80人以上のスタッフを送りこんでいる。インドネシアのバンダアチェにはインドネシア・台湾・カンボジア・カナダの支部と本部が、スリランカの北部、東部そして南部の3地域にはスリランカ・カナダ・ニュージーランド支部と本部が、インドのチェンナイにはインド・ネパール・バングラデシュの支部と本部からのチームが入り、AMDA多国籍医師団として巡回診療や保健衛生教育等の被災者救援活動を実施している。

スマトラ島沖地震・津波の発生した26日の午後6時。インドネシア支部長であるA・フスニ・タンラ教授に緊急電話を入れた。「タンラ先生、現在の被災者の死亡数は800人と発表されているが、大災害へと発展する可能性が高い。直ちにスマトラ島のアチェに緊急救援チームを派遣できないだろうか。本部からも調整員を送りたい」と。「2時間ほど待ってほしい」とタンラ教授の返事。3時間後に折り返し電話があった。「インドネシア支部とハサヌディン大学と合同で6人の医療チームを明日の27日にアチェに向かって派遣するから」と。被災地のバンダアチェでは七つの病院のうち五つは崩壊していた。残りの一つは多数の医師や看護師などが津波で死亡したために機能していなかった。唯一稼働していたのは軍の病院であった。病院長が先発チームのリーダーであるパトルシ教授の教え子だったため、AMDA多国籍医師団は28日より手術等の緊急医療活動を開始することができた。現在でもハサヌディン大学医学生が数多く被災地で活動している。

1月6日。私はインド南部カルナタカ州のマニパールに飛んだ。被災地のチェンナイにインド支部と合同で緊急医療チームを派遣してくれているカスツルバ医科大学の学長に会うためだった。トップ会談である。この医科大学はオリッサ州の洪水（96年）とインド西部大地震（01年）の時にも被災者救援のためにAMDAの緊急医療チームに医師を派遣してくれている。学長と次の3点について合意した。今回の災害で必要がある限りの緊急医療チームの派遣。復興支援への協力。将来の大災害に対するAMDAとの正式な協定の締結である。ちなみにカスツルバとはマハトマ・ガンジーの妻の名前である。

緊急救援活動で大切なことは三つの数字である。災害が発生してから何時間で、どのくらいの数のスタッフを投入したのか、そしてどのくらいの数の被災者が活動による恩恵を受けたのか。今回の緊急救援活動で学んだことの一つは、発展途上国の大学あるいは医科大学との協力関係と連携の重要性である。20世紀の戦争に代わって、21世紀は災害により多くの人達が命を失う可能性がある。「救える命があればどこへでも行く」というAMDAのスローガンを実現するために1カ国1医科大学と緊急医療活動の協定を締結する計画を進めている。人間が助け合うのは最後の最後は顔と顔のつながりであると確信している。

（アジア医師連絡協議会代表）

＝題字は筆者